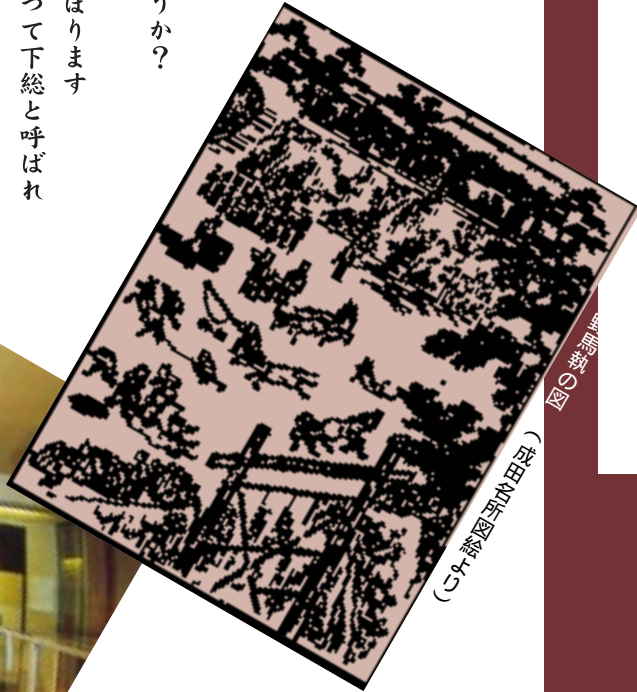


下総種馬場が、富里の「人と馬」との現在の接点の一つであるとすればこの地の馬産の過去との接点にはどのような歴史的背景があるのでしょうか？

そのルーツは、「牧と牧士」にさかのぼります富里の大地をはじめ千葉県北部は、かつて下総と呼ばれ広大な牧には、多くの野生の馬が放牧されていました古くは701年、奈良時代の大宝律令により関東や九州に国営の牧が多数造営され時を経て、牧を支配した地方豪族は武士として権力を握り戦国時代、下総の牧は北条、千葉氏の支配から徳川家康の関東入府以降は「佐倉牧」として明治維新まで、独自の馬文化を築くこととなりますそして、その牧の管理を任されていたのが半農半士である「牧士」というわけのです

歴史の舞台の二番目は、富里町久能にある「藤崎牧士史料館」を訪ね「牧と牧士」の文化の面影をふり返ってみます



図⑨ 藤崎牧士史料館

ルーツの初めに

一路、久能地区へ

【藤崎牧士史料館・沿革】
私は初め、「牧士」を「マキシ」と読んでしまった。これは、正しくは「モクシ」と読むそうだ。

そのような、基本からていねいに教えてくださったのは、この史料館に非

常勤で勤務している、入井てる子さん。

説明によると、この史料館は藤崎家当主の源之助という人物が、蔵に保管されていた牧士に関する資料などを、広く一般に公開展示するために、財団法人として昭和58年に設立したもの。主に、佐倉牧を調べている専門家や学生たちが文献を調べに訪れるという。

藤崎源之助家は本家6代が分家し、天保4年(1834年)から牧士を世襲したいわれがある。

そのため、1階のフロアには、当家が代々収集した

美術工芸品や近世地方文書などが保管

され、また、2階には、佐倉牧の取香牧

に関する貴重な資料、例

えば、牧士装束・馬具・由緒書き・古文書などが展

示され、その内41点が県の文化財として指定されている。



【(財)藤崎牧士史料館：開館日は毎週火・水・土・日曜日
富里町久能583-4 ☎0476-1258】



富里の馬産の始まり

けいちろうけんわ
慶長元和の「大阪の陣」

【牧の確立】

もともと、千葉県は歴史的に古墳時代から馬とゆかりのある地だったが、下総の牧が次第に確立されてきたのは、天正11年（1583）、相模の北条氏康が千葉常胤に命じてつくったのが始まりとされる。

千葉氏滅亡後の天正18年（1590）、徳川家康が関東に入ると、それらは、小金牧・佐倉牧と呼ばび名を変え、また、牧の直接の管理を行う役人は「牧士」と呼ばれるようになった。

そして、佐倉牧を、油田牧、矢作牧、取香牧、高野牧、内野牧、柳沢牧、小間子牧の7つに分け、それぞれを管理させていた。

徳川幕府の体制が確立される頃、本格的に牧が整備されたには理由があると言われている。

それは、慶長19年（1614）の大阪冬の陣、元和2年（1616）の大阪夏の陣を控えた徳川幕府にとって、軍馬の生産は重要かつ緊急を要する課題であったためだ。

幕府直轄の牧場として経営された牧はその後、享保7年（1722）、8代将軍、徳川吉宗は代官・小宮山本進に命じ、牧士の増員や経営形態を変えるなどの改革を行った。

また、管理の実権は江戸の野馬役所が握り、牧士は名字・帯刀、乗馬

を許され、村名主よりも、その地位は上に位置付けられたが、俸禄はそれほど高くなかったようである。

牧士は原則として世襲制で、牧士見習から親の老衰、病気、死亡などによって、家督を代々継いだとされている。

馬の育成と環境づくり

【牧士と村々の協力】

しかし、牧の管理は牧士一人で行っていたわけではない。

牧士以下、牧士並、牧士見習、馬医などが幕府から任命され、牧に隣接する210か村の野付村々との連絡や交渉は牧士の分担によって行い、各牧の共通事業や変更などがあった場合は、牧士全員が協議をしていたとも文献に記されている。

また、牧士は月数回は必ず牧内の見まわりをして、馬の生育管理にも努めていた。

しかし、半ば野生として飼われた馬は、特別な事情がない限り、飼付などはされずに自然環境の中で春秋には青草を、秋冬には枯草を食み、牧場内の樹木によって寒暑をしのぎ、自然の繁殖を営んでいた。

牧士はこれらの野馬が、より良い生育をするために、村々に協力を求めて、さまざまな環境づくりをしていたのである。



「みなさんのご来場をお待ちしています。」と、入井てる子さんと小林特派員から。



牧士が使用したとされる鐙や鞍、鞍につけ牧士と将棋の駒になぞらえた旗印など、藤崎牧士史料館には、数々の所蔵品が展示されている。



将棋駒柄の牧士羽織

風の優駿

～野馬から競走馬に至る歴史の風～

佐倉牧では毎年、夏から秋にかけて勇壮な「野馬捕り」が行われました。放牧されている3,000頭を超える野馬を、捕込に追い込んで捕えるもので、江戸の野馬役人、牧士、勢子廻し、捕手、綱掛ら総勢約500人が参加し、全行程で40日以上を要しました。

馬に乗った牧士が真っ先に立ち、野馬を追います。更に、野馬を追う勢子は野付村々から賦役で差し出された農民で、手には竹棒を持ち、ときをあげ捕込場に追いたててくるさまは、さながら合戦のようであったと言われていました。

小分けに分けられた後、種馬、牝馬、幼馬を選び分け、焼印のないものは馬の尻にその牧の焼印をして野に帰します。そして2、3歳馬、約200頭を酒々井町の野馬会所(市場)へ率いて、農耕馬、役馬としてセリ市にかけられることになります。また、捕らえた馬のうち、2頭は江戸の野馬役所に、10頭は佐倉城主へ献上するのが恒例となっていました。セリの残りの馬は農民に売り渡されていましたが、その価格は慶応年間では20～30両に高騰しています。これは幕末の動乱期に入って、馬の需要が増えたためと考えられています。



野馬捕り図絵(年代不詳) 富里町中央公民館所蔵

四季折々の年中行事

野馬追う牧士たち

【春・人々と馬を守る】

広漠たる原野の牧には、さまざまな鳥獣がいた。そのため、春の「犬防ぎ」と呼ばれる野馬の出生の保護は最大の任務。鉄砲での射殺や、落とし穴をつくるなどをして外敵から仔馬を守る。

また、野馬が村の田畑の作物を荒さぬよう、土手(P12参照)などの修復作業もしなければならなかった。

【夏・役人と村人の間】

江戸野馬役人二人が、約10日間かけて佐倉七牧をすべて行ったとされる「夏見まわり」。

それは、春に出生した当歳馬の観察や、秋に行われる捕馬の準備など。また、村々からの請願の実地見分や牧全体の運営を見ることなど、牧士はその案内人としての役目も担っていた。

【秋・最大行事の捕馬】

田植えと麦刈りが終わった、旧暦の7月末から8月に約40～50日前後の期間行つた。主に2、3歳馬を捕獲し幕府や佐倉藩へ献上する。また、庶民に払い下げるなどもした。

捕馬が終わると、残つた馬の数を調べ、それを野馬役所へ届け、翌年の野馬の管理・増産の参考とした。

【冬・次の季節を待つ】

原野は冬になると枯野となり、火

災の起こりやすい環境に変わる。「野火止め」と呼ばれる山火事を防ぐことも重要視された。それは飼料である枯草を守るという意味でもあった。

また、野馬が牧からでないように作られた木戸があつた場所は、現在も「新木戸」「中木戸」などの地名が残っている。

佐倉七牧と馬の焼印

- ☪ 油田牧・三日月 (佐原市の一部 栗源町岩部・上の台付近)
- ☪ 矢作牧・矢羽 (大栄町・成田市東北部)
- ☪ 取香牧・扇地紙 (成田市取香・三里塚・芝山町岩山付近)
- ☪ 高野牧・蕨手 (富里町高野・十倉付近)
- ☪ 内野牧・亀甲 (富里町七栄・成田ニュータウン付近)
- ☪ 柳沢牧・団扇 (八街市大関付近)
- ☪ 小間子・分銅 (八街市四木付近)



佐倉牧は千葉、山武、印旛、香取の4郡にまたがり、野付村々は210か村を超え、面積は17,720ヘクタールで、富里町の約3.3倍です。また、佐倉牧は7つに分かれており、そのうち、柳沢牧、高野牧、内野牧の3牧は幕府から佐倉城主が管理を任されていました。残りの4牧は、御殿役所の綿貫氏が責任者となり、酒々井町に野馬会所を置いて、その管理をしていたとされています。

()内の地名の由来はP13参照



【七栄の野馬土手：身近なところにある牧の名残。
ちなみに、小林特派員の身長は158cm】

牧の名残に馳せる思い

現在に生き続けるもの

【牧から御料牧場へ】

富里町の地図を開くと、「駒走」「駒詰」「野馬木戸」「古込」といった、馬に由来する小字名があることに気づく。これらは当時、この地に牧が存在したという名残を示すものだ。

また、私たちが住む富里には、実は身近なところにも、牧の面影を見

ることができる。

その1つは、町のいたる所にある「野馬土手」。一見すると、ただの土手であるが、高さは1mから高いものは3m近いものもある。

そしてもう1つは「捕込」と呼ばれる、野馬捕りの際に馬を閉じこめるための囲い。現在、工業団地がある高野グラウンドのそばには、この捕込が人知れず存在している。

今は木々に覆われ、はつきりとした形は見取れないが、きれいに整除すれば、日本一の保存状態の良い遺物であるとも言われている。

「牧と牧士」の歴史は、幕末の大政奉還の後、明治4年（1871）に佐倉七牧を印旛郡が引き継ぎ、その4年後、明治政府は富国強兵策から近代牧畜の推進を図る目的で、取香牧（現成田市と富里町の一部）に下総牧羊場と取香種畜場（後の下総御料牧場）として新たな「馬産」の歴史を築くことになるのである。

います。

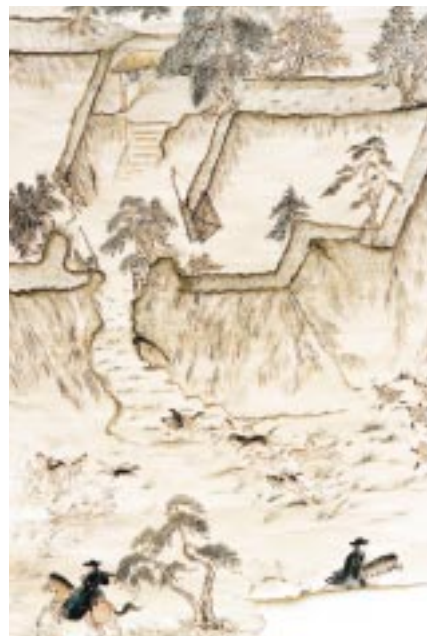
かつては、成田市取香（矢作牧）にもあったのですが、成田空港建設で立派な遺構が、つぶされてしまいました。この素晴らしい捕込を町でも、ぜひきちんと保存することを、考えてはいかがでしょうか。



国学院大学 文学部史学科 大谷 貞夫 教授

私の推論では、佐倉牧の佐倉藩から幕府への移行は、寛文元年（1762）と考えています。万治3年11月に佐倉藩主、堀田正信が領地11万石を没収され、弟の飯田藩主、脇坂安正に召し預けの身となります。その翌年、寛文元年に初めて、牧士が公に任命され、幕府から手当てを支給されるようになっていきます。

牧に生育していた馬は、自然繁殖による馬で、谷津田には馬の水飲み場となる沸き水があり、雪が降った



野馬捕図（小間子牧）（川島亥良氏所蔵）
高野牧の捕込も小間子牧と同じく3つに分かれていた。

江戸時代における幕府直轄の牧には、小金牧と佐倉牧のほか、安房国（現千葉県南部）の嶺岡牧と、駿河国（現静岡県）の愛鷹牧の合計4つの牧がありました。

8代將軍吉宗は、積極的に牧の経営に乗り出し、享保改革の一環として、小金、佐倉、嶺岡の3つの牧の経営に積極的にあたります。また、吉宗は佐倉七牧を、佐倉藩と野馬奉行の2つの部署に任せ、競争させることよって、良い成果を生もつという考えを基本に持っていたようです。

牧士制度の始まりは、慶長19年と言われています。これは、幕府が宝暦5年（1755）11月に、牧士に由緒書きを提出させるのですが、そこに記されていることです。この年は大阪冬の陣があったので、牧士が互いにしめし合わせて、由緒書きを作ったのではないかと思われます。

Interview 02

昔のままの形で、高野に残る貴重な「捕込」
これは、町でもぜひ保存を考えて欲しいものです。

今、房総で一歩しつかりした形で残っている捕込は、富里町の高野にあるものです。昔、牧士や勢子人足が野馬を追い込んだ当時のままの捕込と思っ

ていいですよ。

千葉県の指定

になるほどの重要な史跡だと思います。